コブノメイガ

○ 被害と発生生態

コブノメイガはオス成虫の翅の前縁に黒紫色のコブのようにみえる部分があることからこの名前がついている。セジロウンカやトビイロウンカと同じく、毎年、梅雨時期に成虫が海外から飛来する。飛来後、水田のイネを食害しながら２～３世代発生を繰り返すが、国内では越冬しない。

幼虫は葉を縦に筒状に綴ったり２～３枚を合わせた葉の中に潜み、内側から葉身をかすり状に食害する。被害葉は白く見えるため、多発すると遠方からでも水田が全面白く見える。イネの被害葉は山口県では例年、７月中旬頃からみられるが、上位葉が加害されると特に被害が大きくなる。減収等の被害が問題となるのは、幼穂形成期から出穂期に上位２葉の被害葉率が１５％（株率８０％程度）以上の場合である。なお、被害は６月植え以降の遅い作型や葉色の濃いイネで大きくなることがある。

成虫が飛来してくる時期や量はその年の気象に大きく左右されるため、防除適期は毎年異なる。このため、発生予察情報を参考にほ場での発生動向を確認して防除適期を逸しないよう計画的な対策を取ることが重要である。

○ 防除方法

（ア）耕種的・物理的防除

・葉色の濃いイネは被害が出やすいので、窒素過多を避ける。

・周囲より極端な遅植えは避ける。

（イ）薬剤防除

・年により発生時期、発生量が変動するので発生予察情報に注意し、防除適期予測情報を参考に適期防除（若令幼虫最盛期）を実施する。多発時には２回の防除が必要であるが、出穂時までに防除を行う。

・６月下旬～７月中旬頃に成虫が多飛来した場合、その７日後以降の次世代幼虫による被害葉やつづり葉の葉率（上位２葉）が２０％以上の場合は防除を実施する。

・防除の目安は、成虫最盛期の成虫の払い出しによる調査で、５頭／㎡以上である。

・防除の適期は､粉剤や液剤で防除を行う場合は成虫最盛期(８月上旬頃)から７日後(若齢幼虫最盛期)、粒剤の場合は成虫最盛期である。

・６月中下旬植の遅植えでは８月下旬～９月上旬の第２世代成虫最盛期後の発生にも注意する。

老齢幼虫

成虫

被害葉